日独イディオム比較・対照
— 色彩に関する語を構成要素とするイディオム —*)

植　田　康　成

【キーワード】日独対照・色彩語・イディオム・比喩的意味・コノテーション

Man spricht in der Klasse über die Bedeutung von Farben. Über die Farbe Weiß erzählt die Lehrerin: "Das Brautkleid ist weiß. Weiß ist die Farbe der Unschuld, ein Ausdruck von Freude." - "Aha", überlegt Elvira, "und warum ist der Bräutigam dann schwarz angezogen?" (Valence 1995: 101)
(色の意味に関する授業で、先生が白について説明した。「花嫁衣装は白です。白は、純潔の色です。喜びの色です。」「へー、そうなの」とエルヴィラは考えた。「それじゃ、どうして花婿は黒い服を着ているの？」)

0　はじめに

特定の色彩についての意味づけ、象徴的な意味付与といった点については、かなりに文化的な差異が認められる。たとえば、些細な例ではあるが、道路工事現場やビル建築現場で危険である旨の注意を促すために柵が立てられたり、テープが張られたりしているが、これが、少なくともドイツ語圏では、赤と白が交互に入ったテープとなっていることに、筆者はひどく新鮮な驚きを覚えた。日本では、その配色のテープや幕は、祝い事の際に張られるからである。日本の道路工事現場で見られるのは、黒と黄が交互に斜めに塗られたついたてである。

あるいは、ドイツ連邦共和国の各政党の色は、それぞれ歴史的な経緯があるのだろうが、「キリスト民主同盟」(CDU) は「黒」(schwarz)、バイエルン州独自の保守政党「キリスト社会同盟」(CSU) は「青」(blau)、「社会民主党」(SPD) は「赤」(rot)、「ドイツ自由党」(FDP) は「黄」(gelb) となっている。「緑の党」(Die Grünen) はその名の通り「緑」(grün) である。ブレーメンで1991年に成立した「信号連立」(Ampelkoalition) という表現は、SPD、FDP、Die Grünenの３つの政党による連立のことである[1)]。

本論文では、ドイツ語におけるイディオムの中で、色彩に関する語を構成要素として含むものを取り出し、上述したような文化的差異にも目を向けながら、ドイツ語イディオム学習についての示唆を得ることを目指して、日独両言語のイディオムを比較・対照していくことにする。

1　資料について

ドイツ語と日本語においてどれほどの数の色彩に関する語が存在しているのかを確定するのは、なかなか難しい。たとえば、講談社『日本語大辞典』巻末の「言葉の資料便覧」にある「色名辞典」(2255-2272)には、カタカナの色彩名を含めて、全部で350が上がっている。カタカナの色彩名を除くと、190となる。これらは和語の色彩名といえるだろう。色彩名には、「カーキ色」や「ライラック色」のように、カタカナと漢字の複合されたものもある。また「紅」、「紺」といった漢字一字の色彩名もある。ほとんどは「色」との合成によっている。そういった色彩名の作りを子細に検討することも興味深いが、それは本論文の主題ではない。

本論文において比較・対照するイディオム表現は、日本語については『成語林』から収集した。イディオムの構成要素となっている色彩に関する語は、見出し語となっている表現のみで数えると19であり、イディオムの総数は81である。しかし、「顔色」、「気色」、「声色」、「旗色」、「目の色」を「色」にまとめることもできるだろう。そうすると色彩に関する語の総数は14ということになる。色彩名の多さに比べると、イディオムの構成要素となっている色彩に関する語はきわめて少ないと言えるだろう。

ドイツ語に関しては、まず最初に、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)の "V. Farben" (S.66-74)に収録されている色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現を拾い出した。色彩に関する語といっても、実際には色彩形容詞がほとんどである。見出し語となっている語の数は、全部で18であり、イディオムの総数は92である。

さらに "DUDEN: Bildwörterbuch" (594-595頁)で主な色彩に関する語を選び出し、次にドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)でそれぞれの色彩に関する語に関するものを捜し出した。そしてまた "DUDEN: Deutsches Universal-Wörterbuch A-Z" (DUDEN 1989)にも当たって2、3補った。その結果 "himmelblau"、"braun"、"rosa" の3つを付け加えることにした。キュッパー『絵入りドイツ語口語辞典』(Küpper 1983)からも拾い出して、データに付け加えた。その結果、イディオムの総数は171、色彩に関する語の総数は18となった。

2　資料の分析

2.1　ドイツ語

本論文で取り扱うイディオムの構成要素となっている色彩に関する語は、ドイツ語に関していうならば、実質的には形容詞であるといってよい("Aschgrau" だけが名詞である)。形容詞を構成要素とするという場合、それは形式的に、5つのグループに分けることができよう。1つ目は、色彩に関する語が述語的に用いられていて、イディオムとしての意味をもっている場合である。2つ目は、色彩に関する語が副詞的に用いられている場合である。3つ目は、色彩に関する語が

分離動詞の前綴りとなっている場合である。４つ目は、色彩に関する語が付加語的に用いられている場合である。５つ目のグループは、色彩に関する語が名詞化されている場合である。意味的には、文字どおりの意味か、比喩的な意味かという点からみることができようが、イディオムとしての意味が問題となっているのであるから、当然に比喩的な意味が考察の対象となる。以下それぞれのグループに属するイディオムを個別的にみていく。

2.1.1　統語論的観点から

2.1.1.1　述語形容詞として

blau（青）："blau sein (oder blau sein wie ein Veilchen)"（泥酔している）

braun（茶）："das ist mir zu braun"（行きすぎだ）

gelb（黄）："(grün und) gelb vor Neid (oder Zorn, Wut, Ärger) werden"（妬み、怒り、憤り、腹だち）で顔色が（緑や）黄になる）

grün（緑）："jemandem nicht grün sein"（誰かに我慢がならない）、"grün und gelb werden"（非常に嫉妬深くなる）、"mir wurde grün und gelb vor den Augen"（気分が悪くなる、めまいがする）、"grün hinter den Ohren sein"（未熟である）

himmelblau（空色）："volltrunken"（ベロンベロンに酔っている）

rosa（ピンク）："homosexuell"（同性愛の）

schwarz（黒）："da kannst du warten, bis du schwarz wirst"（いつまでも待ちなさい）、"jemandem schwarz vor (den) Augen werden"（気を失う）

weiß（白）についてはない。日本語には、潔白だという意味で「あいつは白だ」という表現があるが、ドイツ語には "weiß" を述語形容詞として、そのような転義あるいは比喩的な意味で使うことはないようである。

2.1.1.2　副詞として

blau（青）："blau machen"（仕事に行かない）、"jemanden blau und grün schlagen"（たたきのめす）

braun（茶）："jemanden braun färben"（ナチ思想を吹き込む）、"jemanden braun und blau hauen"（誰かを激しくひっぱたく）、"etwas zu braun machen"（あることを誇張していう）

grau（灰色）："alles grau in grau malen (oder sehen)"（あらゆる物事を絶望的にみる）

grün："sich grün und blau ärgern"（非常に腹を立てる）、"jemanden grün und blau schlagen"（誰かをたたきのめす）

himmelblau（空色）："himmelblau kriegen"（終身刑を受ける）

rot（赤）："etwas im Kalender rot anstreichen"（特記する－皮肉として）、"rot sehen"（すぐさま激高する）

schwarz（黒）："mit etwas sieht es schwarz aus"（事態は非常にゆゆしい）、"schwarz

angeschrieben sein (bei jemandem) "(誰かに悪く思われている、嫌われている)、"sich schwarz ärgern" (非常に怒る)、"schwarz auf weiß" (書かれてある、印刷されている)、"aus schwarz weiß machen" (黒を白といいくるめる)

2.1.1.3 分離動詞の前綴りとして

副詞であるか、分離動詞の前綴りであるかは、必ずしも一義的ではない。従って、"blau machen" もこの部類に含めるべきなのかも知れないが、ここでは、1語として書くか、2語として書くかという通常の基準に従っている。

偶然にもこれには白と黒の2つしかない。"schwarzmalen" と "schwarzsehen" の一つの意味「悲観する」を除けば、"schwarz" を前綴りとするその他の動詞は、すべて「無許可に、違法に」という意味をもっているのは面白い。日本語では、無免許運転、もぐりといった言い方になる。ただし日本では「許可無しにテレビを見る」という意味での "schwarzsehen" は、ありえないだろう。法的規制の対象ではないからである。

schwarz："schwarzarbeiten" (許可無しに働く)、"schwarzfahren" (無免許運転する)、"schwarzhören" (許可無しにラジオを聞く、許可無しに講義を聴く)、"schwarzschlachten" (許可無しに動物を殺す)、"schwarzsehen" (悲観する、許可無しにテレビを見る)、"schwarzmalen" (黒く塗る→悲観的にみる)

weiß："jemanden weißwaschen" (誰かの疑いを晴らす (禊ぎ))、"weißbluten" (金を使い果たす)

2.1.1.4 付加語形容詞として

blau (青)："blaues Blut" (高貴な素性)、"blaue Jungen (oder Jungs) " (船乗り)、"blauer Montag" (ずる休みした月曜日のこと)、"mit einem blauen Auge davonkommen" (軽微の損害で難を逃れる)、"den blauen Brief erhalten (oder bekommen, kriegen) " (解雇通知を受け取る)

gelb (黄)："der gelbe Neid" (あからさまな妬み)

grün (緑)："die grüne Grenze" (森や牧場によって区切られた境界)、"ein grüner Junge" (若い未熟な人間)、"jemandem grünes Licht geben" (誰かに許可を与える)、"ach, du grüne Neune" (驚きの叫び)

rot (赤)："rote Zahlen" (赤字)

schwarz (黒)："das Schwarze Brett" (掲示板)、"schwarze Diamante" (石炭)、"der Schwarze Erdteil" (アフリカ)、"etwas in schwarzen (oder den schwärzesten) Farben schildern (oder malen, beschreiben) " (何かを非常に悲観的に述べる)、"schwarze Gedanken (besonders schwarzen Gedanken nachhängen) " (悲観的な考えをする)、"die Schwarze Kunst" (印刷技術、魔術)、"der Schwarze Mann" (恐い人 (子供を脅すときの言い方))、"der schwarze Markt" (闇市)、"jemandem den Schwarzen Peter zuschieben (oder zuspielen) " (誰かに責任を転嫁する)、"das schwarze Schaf (in der Familie) " (のけ者にされた家族の一員)、"eine schwarze Seele

haben"（意地悪な人間、いけず）、"ein schwarzer Tag"（厄日、不幸な日）、"der Schwarze Tod"（ペスト）

weiß（白）："ein weißer Rabe"（類希な人、極めて異常なこと）、"der Weiße Tod"（雪あるいは氷による死）、"eine weiße Weste haben"（不法なことはなにもしていない、潔白である）

2.1.1.5　名詞として

blau（青）："jemandem das Blaue vom Himmel (herunter) holen"（できもしないことを約束する）、"das Blaue vom Himmel (herunter) lügen (oder versprechen)"（大嘘をつく（不可能事を約束する））、"das Blaue vom Himmel (herunter) reden"（つまらないことを延々としゃべる）、"ins Blaue hineinreden (oder träumen, schießen)"（あてもなくしゃべる、あてもなく夢みる、あてずっぽうに撃つ）、"eine Fahrt ins Blaue"（目的地を定めない気まぐれの旅）

grün（緑）："bei Mutter Grün (schlagen, übernachten)"（野宿する）、"dasselbe in Grün"（実際上ほとんど何の違いもなく同じもの）

schwarz（黒）："jemandem nicht das Schwarze unter dem Nagel (oder unter den Nägeln) gönnen"（何も恵まない）、"er hat nicht das Schwarze unter den Nägeln"（すっからかん、文無し、すかんぴん）、"aus schwarz weiß machen"（黒を白といいくるめる）、"ins Schwarze treffen"（的に当てる）、"ein Schuß ins Schwarze"（命中）

最後にグループとしてまとめるほど数がなく、しかもその成り立ちからすると付加語形容詞として用いられている形になっているが、名詞の方が形容詞化されているために、全体として形容詞となっているものがある。例えば "blaublütig"（←blaues Blut（高貴な血筋））である。もう一つは "blauäugig"（初な、ナイーブな）である。これは、さらに名詞化されて "Blauäugigkeit" という表現もある。

weiß（白）："jemanden zur Weißglut bringen (oder bis zur Weißglut reizen)"（誰かを非常に怒らせる）

2.1.2　意味論的観点から

名詞表現 "Aschgrau" を除いたその他の形容詞がイディオム表現の中でどのような意味で使われているかを観察してみよう。

形容詞は、その機能からいって、ある対象が持っている形状や性質を表すものである。従って、形容詞が字義通りの意味を持っているか、比喩的な意味を持っているかという点から、分類することができる。ただし、当該の色彩に関する語（形容詞）を構成要素としている表現全体が、イディオムとしての意味を有していることは、言うまでもない。問題としているのは、構成要素となっている色彩に関する語（形容詞）が有している意味である。

"blau sein wie ein Veilchen"（菫のように青くなっている）という表現は、その形式がすでに直喩であるが、「アルコールを飲んだ結果、顔色が青くなっている」という状態を言い表している。

その意味では、"blau" は、本来の「青」という意味を有していると言える。"j-n blau und grün schlagen"（したたかにぶつ）、"blaue Bohnen"（銃弾）、"blaue Jungen"（船乗り）、"mit einem blauen Auge davonkommen"（軽微の損害で難を逃れる）、"den blauen Brief erhalten"（解雇通知を受け取る）、"j-m das Blaue vom Himmel (herunter) holen"（できもしないことを言う）、"das Blaue vom Himmel (herunter) reden"（できもしない、たわごとを延々としゃべる）が、この部類に属する表現であるといえる。

これに対して "blauer Montag"（青の月曜日）は、月曜日の性質に言及しているわけではない。"blau machen"（仕事をさぼる）というイディオム表現との関連で初めて理解可能な表現である。従って、"blau" は本来的な意味で使われているのではなく、比喩的な意味で使われている。"blaues Blut"（貴族の血統）、"j-m blauen Dunst vormachen"（煙幕を張る）、"sein blaues Wunder erleben"（災難に遭う）、"ins Blaue hinein reden"（たわごとをしゃべる）、"eine Fahrt ins Blaue"（行き先をきめないドライブ）がこの部類に属する[2)]。

18の色彩に関する語を、比喩的／非比喩的、つまりその色彩に関する語が本来の色彩としての意味を有しているか、いないかという観点から分類してみたところ、比喩的な意味で使われているイディオム表現が61、非比喩的な意味で使われているものが110となった。非比喩的つまり字義的な使用が、比喩的な使用の約2倍ほどある。比喩的な意味で使用されているという場合、その比喩の方向が観察するに値するであろう。その点から比喩的な意味で使用されている例を子細に検討していくことにしよう。

"ins Aschgraue hinausschießen" は、遠くの霞んでしまって、灰色となっている彼方という意味で使われている。実際に灰色であるかどうかは、問わない。要するに、見分けがつかないという意味で使われている。

"blau" については、2つの意味の方向が区別できるようである。一つは、不可能、あり得ないという意味、もう一つは明確にできないという意味である。"das Blaue vom Himmel herunterlügen" が前者の代表例であり、"j-m blauen Dunst vormachen" が後者の例である。"blau machen"、"blauer Montag" も後者の意味から出てきていると考えられる。

"bunt" は、「色とりどりである」というのが、本来の意味であるが、あまりにも色とりどりになると収拾がつかなくなり、行きすぎだということになる。"bunt" の場合は、完全に本来の意味から離れてしまっているわけではない。

"Farbe bekennen" は、色の意味ではなく、見解、考えという意味になっている。政治的な党派色という意味の用法が、一般化したものと考えられる。

"gelb" がどうして「嫉妬」と結びつくのか、よくわからない。

"golden"（黄金色）は、"Gold"（金）が金属中一番高い価値を持つものとされていることから、「最高の価値を持つ」あるいは「非常に貴重な」という特徴が比喩的な意味の中心をなしている。

"jmdm eine goldene Brücke bauen" や "goldene Hochzeit"（金婚式）、"der goldene Mittelweg" における "golden" がそうである。

"silbern"、"kupfern" の比喩的な意味は、この "golden" との関係で、価値が規定されており、それが意味の中心をなしている。"Goldene Hochzeit"（金婚式）、"Silberne Hochzeit"（銀婚式）、"Kupferne Hochzeit"（銅婚式）と列挙するとき、その価値序列が明白になる。

"Grau, teuer Freund, ist alle Theorie und grün des Lebens goldner Baum"（友よ、すべての理論は灰色で、生命の黄金の木は緑だ）というゲーテ『ファウスト』の中の言葉が明確に述べているように、「無味乾燥」、「生気のないもの」という意味で "grau" は "grün" と対照をなす。"das graue Elend haben" という表現における "grau" は、「救いようのない」という意味を有していて、悲惨の意味を強めている。色彩としての「灰色」の意味はほとんど消失しているといっていいだろう。

"grün" については、「未熟な」という意味が比喩的な使い方であるが、もちろんこれは果実からの連想であろう。"ein grüner Junge" がその代表例といえる。さらに派生して「現実、経験をふまえない」という意味にもなっていく。"am grünen Tisch entscheiden"（純理論的に決定する）はこの意味で使われている。"j-m nicht grün sein"（誰かが我慢できない）というのは、逆の方から表現していると考えられる。つまり、誰かに対して経験を積んでおり、よく知っているがゆえに、我慢できないということになっているのだろう。また、「めまいがして目の前が暗くなる」というのは、日本語においてもふつうの表現であり、素直に理解できるが、"mir wurde grün und gelb vor den Augen"（目の前が緑と黄になった）というのは、奇異な感じがする。

"rosarot"（ピンク色）は、イディオム表現に現れている限りでいうならば、"schwarz"（黒）と対照をなしている。"alles in rosarotem Licht sehen"（すべてを楽観的に見る）の反対が "schwarzsehen"（悲観的に見る）である。

"rot sehen"（激怒する）は、怒りのあまり頭、そして目にも血が上り、「赤く見える」ということなのであろう。激怒した結果の状態を表現しているといえる。

"schwarz" については、まず「悲観的」という意味がある。"schwarzsehen"（悲観的に見る）がその代表である。2番目は、「非合法、不法」という意味である。"schwarzarbeiten"（就業許可なしに働く）、"schwarzfahren"（無賃乗車する）がその代表であり、"Schwarzmarkt"（闇市）もこれに属する。第3番目は、「不運な」という意味である。"ein schwarzer Tag" は「運の悪い日」、日本人の発想でいえば、「さんりんぼう」ということになろう。もう一つの意味は、「邪悪な」というものである。"eine schwarze Seele haben"（邪な魂）にその意味が顕現されている。"die Schwarze Kunst"（魔術）も、そもそもはいかがわしいものであったのだろう。

"weiß"（白）が「清潔」、「けがれないもの」と結びついているのは、ドイツ語においても同じである。"weißwaschen"（浄める）は、「洗って、汚れがないようにする」という意味であり、日本

語の「みそぎ」にあたる。"eine weiße Weste haben" における "weiß" も同様に、「白い」という意味はなく、「汚れがない」という意味である。

"braun"(茶色)が「行きすぎである」、「耐え難い」という意味を持っているのは、どうしてか。キュッパー(Küpper 1983)によると、どの地方の方言かははっきりしないが、"braun" が "bunt" の意味で使われてもいるからである(Küpper 1983 : 471)。すなわち "das ist mir zu braun(= bunt)" というわけである。しかし、どうして "braun" が "bunt" となるのか、という疑問は残る。

以上、比喩的な使用に関して観察してきたのであるが、最後に、共感覚という視点から観察するとどうなるであろうか。ドイツ語の171の用例を眺めるかぎりでは、色彩は視覚によって知覚されるものであるが、18の色彩に関する語が視覚以外の感覚について使われているものはひとつもない。"der gelbe Neid"(黄の妬み)や "schwarze Gedanken"(邪な考え)といった使用例はあるが、これは、思考、性格について言及しているのであり、共感覚とは関係がない。

2.1.3 語用論的観点から

ほとんどの色彩に関する語に関していえると思われるが、色彩には明るいあるいは暗い、清潔か汚れているかといったイメージが伴っている。そのようなイメージがイディオム表現の意味にも反映していると思われる。また、実際にどのようなコンテクストで使用されるのか、当該のイディオム表現がどのような発話行為の遂行において使用されるのかという点から、イディオム表現を観察することができよう。つまり、当該のイディオム表現が、肯定的な意味合いを伴っているか、否定的な意味合いを伴っているかという点から、観察することができるだろう。

たとえば "jemandem blauen Dunst vormachen"(誰かに対して青い靄をつくる)や "das Blaue vom Himmel (herunter) holen"(空の青を引き下ろしてくる)といった表現は、明らかに否定的な価値判断を背景にして使用される。イディオム表現が指示している行為をおこなっている人に対して、否定的な価値判断を話し手は下しているということである。これとは対照的に "jemandem Farbe halten"(誰かの色を守っている)や "jemandem eine goldene Brücke bauen"(誰かのために黄金の橋を築く)は、当該の行為に対して肯定的な判断を話し手が持っていることが前提となっている。"bunte Reihe machen"(色とりどりの列を作る)や "bei Nacht sind alle Katzen grau"(夜には猫はすべて灰色だ)は、そのような価値判断については、中立的であるといえる。使用状況によって、肯定、否定いずれでもありえる。

拾い上げた171のイディオム表現を肯定的、中立的、否定的という3つの部類に分けると、それぞれ9、70、92という数になる[3)]。半数以上のイディオム表現が、否定的な意味合いを持って使われるということが目立つ。肯定、否定のいずれにしろ、イディオム表現のほとんどが話し手の主観的な価値判断に関わっていることに注意すべきであろう。このことは、イディオム表現がきわめて感化的な意味内容を伴っているということにも繋がっていく。

イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語のすべてについて言えるわけではないが、「はじめに」でも述べたように、いくつかの語が政治的な意味合いを持っていること、しかも、それが日本語社会におけるのとは異なった意味合いを持っていることに、日本語を母語とするドイツ語学習者は留意する必要がある。とりわけ "braun" は、ドイツ現代史における政治的不幸と密接しており、特別なコノテーションを持っている。"rot"、"grün"、"gelb"、"schwarz" についても、TPOに配慮して使うことが必要になってくると言えるだろう。

2.2. 日本語

日本語における色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現において、いちばん数が多いのは、白に関するイディオム表現である (19)。それに次いでいるのは、ずばり「色」という語そのものを構成要素とするイディオム表現である (14)。「顔色」（2）、「気色」（1）、「声色」（1）を付け加えると、18ということになる。

拾い上げた81のイディオム表現を、ドイツ語に関して行ったように、統語論、意味論、語用論の観点から観察していくことにしよう。

2.2.1　統語論的観点から

統語論的（あるいは形態統語的）な視点から、拾い上げた表現は、名詞的表現、動詞的表現、形容詞的表現、形容動詞的表現、副詞的表現の５つの部類に分けることができる。

名詞的表現とは、たとえば「赤い信女」、「赤の他人」等、全部で29の表現がある。

動詞的表現とは、「青くなる」、「青筋を立てる」といったように、最後に動詞を伴っているものである。この部類に属するものは、42ある。

形容詞的表現とは、最後に形容詞を伴っているものである。「顔色無し」、「気色が悪い」、「嘴が黄色い」、「尻が青い」、「朱を注ぐ如し」の５つがこの部類に属する。

形容動詞的表現とは、「青息吐息」、「黒山のよう」のように、その表現のあとに「だ」を補うことによって、述部を形成することができるものと考える。「白魚を並べたよう」、「明々白々」を加えて、全部で４つということになる。

副詞的表現としては、「目の黒い内」ひとつだけである。

2.2.2　意味論的観点から

日本語の81のイディオム表現についても、色彩に関する語が比喩的あるいは非比喩的な意味で使われているかどうかという観点から、観察してみよう。

筆者の判断では、「青くなる」、「青筋を立てる」といった表現における「青」は、字義通りに対象が「青い」ことを指示していると考える。対照的に、「青田を買う」は、もちろん本来的には、麦や大豆、稲が実る以前の状態で買うという意味であったのであろうが、現在では多くの場合比喩的に「完熟する以前に買う」という意味で使われている。その意味で比喩的であると考える。

「尻が青い」も、本来的には、乳児期には、実際に尻が青いこと（蒙古斑）を指していたのだが、転義的には、精神的に未熟であることを意味するようになっている。そのような考えに基づいて、比喩的か、非比喩的かに分けると、その数は46と35となっている。ドイツ語と比較すると、やや日本語の方が比喩的な用法が多いといえるだろうか。

2.2.3　語用論的観点から

イディオム表現が肯定的な価値判断をふくんでいるか、否定的な価値判断をふくんでいるかという点から見ると、どうなっているのであろうか。「青」に関する９つの表現のうち、「青くなる」、「尻が青い」のように、否定的な状態を意味しているものが７つある。他方、肯定的な状態を意味している表現は、「青眼」、「青天白日」の２つだけである。このような観点から、81の表現を分類してみると、肯定的な意味で使われるものは「紅一点」、「金字塔をうち立てる」等、17である。明らかに否定的な意味で使われるものは44という数に上る。「あけに染まる」等、20の表現が価値判断に関しては中立的であると判断される。

本論文における考察を展開するために拾い上げた資料には含まれていないが、日本語においても色彩に関する語が政治的連関で用いられることがないわけではない。しかしながらすぐにも思いつくのは、「赤に染まる、赤にかぶれる」（共産主義思想、社会主義思想を信奉する）という表現のみである。

3　分析に基づく比較・対照的考察

以上において、日独両言語における色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現を観察し、分析してきた。以下、これらの観察、分析結果に基づいて、比較・対照しながら、考察を展開してみたい。

日独両言語において、イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語の数は、日本語においては14、ドイツ語においては18となっている。全体の数がそれほど多くはないので、４つの差は大きいといえるだろう。ドイツ語の方が日本語よりも多くの色彩に関する語をイディオム表現に取り込んでいるということになろう。

いずれの色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現が多いかを、両言語に関して比較するならば、ドイツ語においては、黒が圧倒的に多い（36）。それに次ぐのが、緑である（25）。そして "blau"（18）、"rot"（17）、"weiß"（16）と続く。他方日本語において一番多いのは、「白」（19）であり、「色」（13）、「青」（９）、「赤」（８）、「黒」（６）と続く。ドイツ語において一番多い「黒」が、日本語においてはそれほど多くはないというのが目立つ。逆に日本語において一番多い「白」が、ドイツ語ではそれほど多くはないというのはおもしろい。とりわけドイツ語においては、"golden"（黄金色）に関するイディオム表現が多いのが興味を引く。いずれの色彩に関する語が、なじみの深いものであるかという観点から見て、これらのイディオム表現に登場する色彩に関す

る語は、いずれも両言語文化圏の色彩に関する関心を反映しているといえるであろう。

以下、本節では、日本語、ドイツ語両言語に関して双方向的に、個別の色彩に関する語を含むイディオム表現を比較・対照して、ドイツ語のイディオムを学習する際に留意するべき点について考えていくことにしたい。現実における色彩の認識と言語表現上のずれの問題はあるとしても、イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語で、日独両言語において出現しているものは、「青」、「赤」、「黄」、「金」、「緑」、「白」、「色」、「黒」の８つである。これらの色彩に関する語について、個別的に見ていくことにしよう。

１．「青」と "blau"

「青くなる」と "blau sein"（酔っている）は、表現はほぼ同一であるといえるが、意味は異なっている。「偽の友だち」関係にある表現である。厳密にいえば、ドイツ語の方は、「青くなる」ではなく、「青くなっている」という状態を表現している。日本語においては「青くなっている」といっても、意味は変わらないので、「偽の友だち」関係にあると考えてもいい。意味的に「青くなる」に対応するドイツ語の表現は、"blass werden" である。"das Blaue vom Himmel (herunter) holen"（空の青をとってくる）、"mit einem blauen Augen davonkommen"（青い片目で逃れる、青あざの片目で逃れる）という２つの表現における "blau" は、「青」に対応しているが、それ以外は「青」には対応していない。"sein blaues Wunder erleben"（青の奇跡を体験する）における "blau" は、予期しなかった悪いことにめぐり合って「青ざめる」という意味でも理解可能である。その場合は、日本語の「青」に対応しているといえるだろうが、ドイツ語の発想では、「予期しなかった、通常ではあり得ない」という意味の方が意味の核をなしていると考えられる。

日本語の「青」は、ドイツ語の "blau" が持っている「不可能な、不確実な」という意味は持っていない。そしてドイツ語の "blau" には、「未熟な」という意味はない。その意味での「尻が青い」に対応するドイツ語の表現は "ein grüner Junge"（緑の若者）である。

ドイツ語では "der blaue Planet"（青の惑星）と表現しているが、日本語では「緑の惑星」である。また、交通信号は日本の道路交通法では「赤、黄、青」ということになっているが、国際的には「赤、黄、緑」である。認識と言語表現のずれが絡んでいるのであろうが、日本語の「青」、「緑」、ドイツ語の "blau"、"grün" は、両者を合わせて、対応関係を考えた方がよさそうである。

２．「赤」と "rot"

日本語の「赤」は、「明らかな」という意味を有している。「赤の他人」、「赤恥をかく」、「赤貧」がこれに属している。また「赤」といってもその色合いにはかなりの幅があるようである。「赤犬が狐を追う」という表現から、そのことが推測される。「狐色」に近い「赤」も存在するということである。ただし、現在の日本語の感覚としては、このイディオム表現は理解しにくいものとなっているのではないだろうか。

興奮したときや怒ったときに「顔を真っ赤にする」のは、日本人でもドイツ人でも同じである

だろう。ただその「顔色」を「赤」と表現するか、「黒」と表現するかの違いは、認識の違いでもあるし、言語の意味体系の違いでもあるといえるだろう。ドイツ語では "sich schwarz ärgern"（黒く怒る）あるいは "sich grün und blau ärgern"（怒りで緑になったり、青くなったりする）と表現しているからである。血液が集まりすぎて、青、そしては黒となるのであろう。従って「顔を真っ赤にする」を素直にドイツ語で "das Gesicht rot machen" あるいは "das Gesicht wird rot vor Wut" と表現しても、おおよその意味は伝わるだろうが、怒りの度合いは薄まって伝わることになるような気がする。"mit roten Ohren abziehen"（赤い耳で引き下がる）にあるように、ドイツ人は恥じ入ったとき、耳が赤くなるようであるが、日本人は「顔を真っ赤にする」か「顔から火が出る」。

ドイツ語の "rote Zahlen"（赤字）という表現は、問題なく理解できる。しかし、"der rote Faden"（赤い糸）は、「偽の友だち」である。ドイツ語の方は、「指導的な考え、基本動機」といった意味だが、日本語においては男女関係について「縁」という意味で使われる。"die rote Laterne"（赤提灯）も「偽の友だち」である。ドイツ語の方は、「どん尻」を意味するが、日本語では「居酒屋」を意味している。「どん尻」の意味では "Schlusslicht"（後尾灯）の方が日本語を母語とするものにも理解しやすい。

日本語においては対応するイディオム表現は存在していないが、"sich die Augen rot weinen"（目を赤く泣きはらす）という表現は、比較的理解しやすいといえよう。"ein rotes Tuch für jemanden sein/wie ein rotes Tuch auf jemanden wirken"（誰かにとって赤いタオルの効果を持つ）という表現も、赤い色が牛を興奮させるということを、スペインにおける闘牛との連関で思い浮かべるならば、理解可能となるだろう。日本語では「痛い目にあうぞ！」といって脅しても、どのようにして痛い目にあわせるのか明白ではない。ドイツ語の方はもっと具体的に "es gibt gleich rote Ohren"（すぐに赤い耳になるぞ）と表現している。つまり、「耳」を引っ張るか、耳を含めた横っ面を張るかするだろうと想像することができる。

3．「黄」と "gelb"

日独両言語において "gelb"（黄）を構成要素とするイディオムは、数少ない。"grün und gelb (vor Neid usw.) werden"（妬み等で緑になったり黄になったりする）と "mir wurde grün und gelb vor den Augen"（目の前が緑と黄になる）は "grün"（緑）として数えたのだが、それを含めても、ドイツ語でも４つということになる。

イディオム表現の意味から単純に考えて、ドイツ語では「黄」は「妬み」の色であるといえよう。他方、「嘴が黄色い」、「黄色い声」、「黄泉の客」という表現に共通する意味特徴があるようには思えない。「尻が青い」に見られるように、「未熟、未経験」という意味が「黄」にもあることが確認できる。イディオム表現に見られる限りで言えば、ドイツ語の色彩に関する語には存在しないのだが、「黄色い声」は、本来視覚対象に言及する語を聴覚現象へと転用しているという、いわ

ゆる共感覚現象に関わっている。

4．「金」と "golden"

日本語の「かね」という音には、「金」、「銀」（さらに「鉄」）という漢字を当てることができるが、まさにそれらの漢字が示しているように、「金」は金属の中で一番価値があるものとされ、貨幣制度の根本である。ドイツ語の "Geld"（おかね）も "Gold"（金）に関連があるかと思われるかも知れないが、残念ながら語源的にはそうではない。"gelten"（通用する）という動詞と語源的には結びついている。語源はともかくとして、ドイツ語のイディオムを見る限りでは、"Gold"（金）がお金と密接していることに疑いを差し挟む余地はないようである。「高い価値のある」という意味を持ったイディオム表現がほとんどすべてである。その意味は「金」が持っている価値から派生したものであると見なすことができる。

ただし、"in einem goldenen Käfig sitzen"（黄金の籠に座っている）、"das Goldene Kalb anbeten"（黄金の牛に祈りを捧げる）、"der Tanz um das Goldene Kalb"（黄金の牛のまわりで踊る）といった表現が示しているように、金の価値をあまりにも盲信するとき、人間は富んでいてもその富に束縛され不自由になり、強欲、吝嗇となり、その人間性に疑問符がつくことになる。「金看板を掲げる」という日本語の言い回しも、高価値の金の見せかけだけをまねた愚かしさを批判的に捉えている。

"goldene Hochzeit"（金婚式）は、現在では日本でも普通に使われているので、誤解の余地はないであろう。しかしながら、日本においては普通に使われる「ゴールデン・ウィーク」との連想で "Goldener Sonntag"（金の日曜日）を捉えると、大きな誤解をしてしまうことになる。黄金の日曜日とは、クリスマス直前の日曜日をいうのである。

5．「緑」と "grün"

日本語においては「緑」に関するイディオム表現は２つしかない。「緑林」は、転義的に「盗賊」を意味する。「緑の黒髪」は、「つやのある黒髪」という意味だが、この場合の「緑」は、若々しいという意味合いが込められていると考えられる。中国由来の転義的な「盗賊」という意味を除外して考えると、緑は、日本語において、否定的な意味合いは持っていないといえる。日本語において２つしかイディオム表現がないのであれば、以下は、ドイツ語の表現を観察しながら、論述することになる。

ドイツ語においては、"grün" に関するイディオム表現は25と数多いが、これは森の国ドイツを象徴しているものといえるのだろうか。

"grüne Minna"（緑のミンナ→警察の護送車）は警官の制服やパトロール・カー等がドイツでは緑であることに由来している。"grüne Welle" と合わせて、警察関係が２つあるというのは、ドイツの特徴であろうか。そもそもなぜ警官の制服は緑なのであろうか。緑の多いドイツでは、背景と一体化して、目立ちにくいと思われるが、それはプラスにもマイナスにも作用し得るのでは

ないだろうか。

"gelb" の項で言及したように、"grün und gelb" という具合に対句として使われるが、"grün und blau" と同じように、肯定的な意味では使われていない。妬みや、腹立ち、殴打、失神に関連して使われている。

"eine grüne Hand haben"（緑の手を持っている）、"grüne Hochzeit"（緑の結婚式）が肯定的な意味の代表例である。

"jemandes grüne Seite"（誰かの緑の側）が「誰かの左側」を意味するのは、なぜなのか。左手が一般に不器用であるのと、緑が持っている未経験、未熟という意味がつながったのであろうか。

6．「白」と "weiß"

「白」は一般には清潔、純粋といったイメージと結びついていると考えられるが、イディオム表現を見る限りでは、その意味を有しているものはない。「白を切る」、「白紙に返す」、「明々白々」に共通しているのは、なにも書かれていないという「白い」の本来的な意味だけである。「白を切る」というのは、脳になにも銘記されていないということである。「白い歯を見せる」は、微笑んだときの結果を意味内容としていることになる。「白い目で見る」というのは、横目で見るとき、白い部分が目立つということに依っている。これも結果を意味内容としている。「白寿」というのは、漢字のつくりに依っているのだが、ことば遊びともいえる。

一方、ドイツ語には「潔白、清潔、純粋」という意味内容を顕現しているイディオム表現が存在している。"jemanden weißwaschen"（誰かを洗って白くする→誰かの嫌疑を晴らす）、"eine weiße Weste haben"（白いベストを着ている→潔白である）がそうである。"der weiße Tod"（凍死）、"weiße Weihnachten"（雪のクリスマス）は、ドイツの気候を反映しているといえよう。酔ったときや、精神が錯乱状態に陥ったとき、ドイツの人は "weiße Mäuse sehen"（白い鼠を見る）ようである[4)]。

"ein weißer Fleck auf der Landkarte"（地図の上の白い部分→処女地）という表現は、日本語としても馴染みのものであるが、本来は外来のものであるのだろう。

7．「色」と "Farbe"

日本語、ドイツ語いずれの言語においても「色」と "Farbe" が、具体的にどの色を指しているのかは明らかではない。まず日本語の「色」は、「男女関係」、「偏見」、「（とりわけ顔の）皮膚の色」、「手段、方法」という意味を持っている。「男女関係」に関して「色」が使われている表現が多い反面、具体的な「色彩」の意味で使われる例がないというのが目立っている。ドイツ語において "Farbe" がそのような意味で使われることはない。ドイツ語の "Farbe" は、「信条、思想」、「皮膚の色」、「色彩」という３つの意味に分かれる。

「色を失う」は、ドイツ語においては逆の方から表現しているが、"Farbe bekommen"（色を取

り戻す）に対応させることができよう。表現も意味も重なり合っていると考えてよい。

日本語の「色眼鏡で見る」は、具体的にどの「色」であるかがわからないので、「偏見でものを見る」という抽象的な意味で理解するしかない。ドイツ語では色が具体化されて "durch eine rosarote Brille sehen"（ピンクのメガネを通してみる→非常に楽観的に判断する）となっている。楽観的な見方以外はどうするか。悲観的な見方という場合は、"schwarz" という形容詞を "Brille" の前に付加して、"durch eine schwarze Brille sehen" と表現してもほぼ理解可能ということになろうが、「色眼鏡」＝"Farb (en) brille" と考えて、"durch eine Farb (en) brille sehen" というわけにはいかない。日本語でいう「色眼鏡」は、ドイツ語では "Sonnenbrille"（サングラス）だからである。ドイツ語で表現するときには、どのような方向の色合いかを具体的に形容詞や副詞で表現することが必要になる。

8．「黒」"schwarz"

日本語においては「黒白」あるいは「白黒」というように、対照的に使われる例が多いといえるが、ドイツ語においては "schwarz auf weiß"（白の上に黒く）、"aus schwarz weiß machen"（黒から白をつくる）の2つが対比を強調している。後者については、日本語でも「黒を白と言いくるめる」という言い回しがある。前者に対応するのは「明々白々」であろうが、この日本語の表現には「黒」は登場していない。

ドイツ語における "schwarz" は「不法に」という意味で使われているが、"Schwarzmarkt"（闇市）、"schwarzarbeiten"（もぐりで働く）に見られるように、その意味に対応しているのは、日本語では「闇」あるいは「もぐり」である。

"in die schwarze Zahlen kommen"（黒字になる）等、黒字に関する表現は、日本語としても容易に理解できるものであり、ほとんど重なり合っている。"das Schwarze Brett"（黒板）も、重なり合っている表現といえるが、必ずしも「黒（い）板」とは限らないことも頭に入れておく必要がある。要するに「掲示板」である。日本語で「黒板」といえば、教室の「黒板」を思い浮かべるが、ドイツ語では "Tafel"（板）というのがふつうである。

"die schwarze Liste"（ブラック・リスト）は、英語からの借用翻訳であり、日本語においては外来語として通用している。

日本語における「黒」に関するイディオム表現のうち2つが人間に関するものであること、しかもとりわけ日本人の人種的特徴に関わっているということは、面白い。当然ながら、「黒山のよう」、「目の黒いうち」といったような表現は、ドイツ語においてはそれに対応する表現は存在しない。「黒山の人だかり」は、ドイツ語では "Menschentrauben"（人間の房）、「目の黒い内」は "solange man lebt" とでも表現するしかないであろう。

4 おわりに

以上、日独両言語における色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現を、日本語母語話者がドイツ語を学習するということを念頭において、比較・対照してきた。理解および産出において問題となるのは、「偽の友だち」関係にある表現であるといえるが、色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現に関しては、それほど数多くはない。「青くなる」と "blau sein"、「赤い糸」と "rote Faden"、「赤提灯」と "die rote Laterne"、「黒板」と "das Schwarze Brett" の4つのペアが、「偽の友だち」関係にある表現として抽出できた。

「偽の友だち」関係にある表現が学習上注意すべきであることはいうまでもないが、色彩に関する語を構成要素とするイディオムに関しては、それ以上に、日独両言語文化圏における色彩そのものが持っている政治的な意味合いにもっと注意を払うべきであろう。あるいは特定の感情表現が日本語を母語とする学習者にとっては思いもつかないような色彩と結びついているということを銘記すべきであろう(たとえば "(grün und) gelb vor Neid werden" (妬みで緑になったり黄になったりする))。

「はじめに」で述べたように、政治的な連関以外で、色彩が象徴的な意味を持っていることはいうまでもない。赤白の幕は、日本ではおめでたいことを意味しているが、ドイツ語圏では危険を意味する。黒が喪の色であるのは、ドイツ語圏でも日本でも同じである。しかし、そのような社会的、文化的な象徴的意味合いについての比較・対照は、言語分析の範囲を超えるものといえよう。

最後にウィットをひとつ掲げて、色彩に関する語を構成要素とする日独のイディオムに関する本論文を締めくくりたい。

> Deutsches Eintopfgericht in den vierziger Jahren: Wenig Hirn, sehr viel Kohl, **mit brauner Sauce** aufgewärmt. (Kunz 1999: 106)
>
> (40年代におけるドイツの鍋料理:わずかの脳味噌、キャベツはたっぷり、そして茶色のソースでぐつぐつ煮る[5])

5 注 釈

*) 本論考は、2001年2月26日広島大学大学院文学研究科に提出した学位請求論文「ドイツ語イディオム学習・教授法に関する総合的研究」の第7章を短縮したものである。本来資料も掲載すべきであるが、スペースの都合で割愛せざるを得ない。文献指示についても最低限のものを掲げてある。いずれについても、詳細は上記論文を参照いただきたい。

1) 本来交通信号は「赤、黄、緑」の三色の灯からなっているというのが普通の理解である。しかし、2000年12月29日の『バーデン新聞』インターネット版には、バーデン・ビュルテンベルク州に関する記事として、「黒−緑−黄信号」(Schwarz-grün-gelbe Ampel) という見出しが

あった。来る2001年３月25日におこなわれる州議会選挙の結果によっては、キリスト民主同盟(CDU)と緑の党(die Grünen)、ドイツ自由党(FDP)３党による連立政権の可能性もあるということを、緑の党州本部長が表明したという記事である。

政治的コンテクストでは、「信号」はもはや本来の「赤、黄、緑」からだけでなく、ともかくも異なる３つの色合いの政党による連立を意味するようになっているようである。「信号」が持っている意味特徴のうち「３つの色からなっている」という特徴だけが取り出されているのである。ついでながら、いずれもドイツ連邦共和国では非合法となっているが、共産党は「赤」、ナチは「茶色」である。

2）青という色は、ドイツ・ロマン派においては、きわめて象徴的な色でもあったことが思い起こされる。Novalis(ノバーリス)(1772-1801)の代表作 "Heinrich von Ofterdingen"(1802)において、清浄な世界へのあこがれを象徴するものが "Blaue Blume"(青い花)であった。日本においては、ノバーリスのこの小説は『青い花』として知られている。また、象徴派に属するベルギーの作家Maeterlinck(メーテルリンク)(1862-1949)の童話も "L'oiseau Blue"(青い鳥)(1908)であった。

3）色彩に関する語を構成要素とするイディオム表現に伴う価値評価に関する判断は、2001年１月現在ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト市から短期留学生として広島大学で日本語を学んでいるオリバー・シュワルツ(Oliver Schwarz)氏によるものである。同氏に協力を感謝する。

4）"Wer mit einem Kater Auto fährt, sollte sich vor weißen Mäusen hüten!"(Witzebuch 1997: 486)(二日酔いで車を運転する者は、白いネズミに気をつけなければならない！)"mit einem Kater" という表現は、"einen Kater haben"(二日酔いしている)というイディオム表現との連関で理解されるべきである。"Kater" には、いうまでもなく「牡猫」という意味もある。"weiße Mäuse"(白いネズミ)は、実際は道路の白い車線をさしているのだろうが、二日酔いしている者には、白いネズミに見えるのだろう。「猫」から「ネズミ」という連想にこのウィットの落ちは依拠している。

5）40年代とあるが、意味されているのはナチが政権を握っていた時代である。茶色のソースとあるのは、ナチを暗示している。

6　参考文献表

DUDEN 1977: Das Bildwörterbuch der deutschen Sprache. 3., vollständig neu bearbeitete Auflage. Bearbeitet von Kurt Dieter Solf und Joachim Schmidt in Zusammenarbeit mit den Fachredaktionen des Bibliographischen Instituts. Mannheim/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

DUDEN 1989: Deutsches Universal-Wörterbuch A-Z: 2., völlig neu bearbeitete und stark erweiterte Auflage. Herausgegeben und bearbeitet vom Wissenschaftlichen Rat und den

Mitarbeitern der Dudenredaktion unter der Leitung von Günther Drosdowski. Mannheim/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

DUDEN 1992: DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

Friederich 1966: Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.

Küpper 1983: Heinz Küpper, Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache. Stuttgart: Klett Verlag.

『日本語大辞典』、講談社。

尾上兼英編『成語林』、旺文社、1992年。

Valence 1995: Tom Valence, 1000 tolle Schülerwitze. Würzburg: Arena Verlag.

Witzebuch 1997: Witzebuch über 1000 Witze für junge Leute. Stuttgart: Fischer Verlag.

Kontrastive Phraseologie: Deutsch-Japanisch

— idiomatische Wendungen mit Farbbezeichnungen als Hauptkomponenten —

Yasunari UEDA

In der vorliegenden Arbeit werden solche deutsche und japanische idiomatische Wendungen, in denen Farbbezeichnungen als Hauptkomponenten vorkommen, kontrastiv betrachtet. Daten dazu werden jeweils für das Deutsche aus dem Friederichs "Moderne Deutsche Idiomatik" (Friederich 1966) und für das Japanische aus "Seigorin" (Ogami (Hrsg.) 1996) gesammelt, um zunächst festzustellen, wie viele Farbbezeichnungen in idiomatischen Wendungen als Hauptkomponenten verwendet werden und wie viele solche idiomatische Wendungen es in der jeweiligen Sprache gibt: es ergeben sich 18 Farbbezeichnungen in insgesamt 171 idiomatischen Wendungen für das Deutsche, 14 Farbbezeichnungen in insgesamt 81 Wendungen für das Japanische. Dann werden diese idomatische Wendungen morpho-syntaktisch, semantisch und pragmatisch betrachtet und kontrastiert, um anschließend daran einige sprachdidaktische Überlegungen anstellen zu können. Bei der semantischen Betrachtung werden die gesammelten idiomatischen Wendungen in der jeweiligen Sprache daraufhin gesichtet, ob die Farbbezeichnungen in einer metaphorischen oder wörtlichen Bedeutung gebraucht werden. Beim metaphorischen Gebrauch der Farbbezeichnungen sind einige Unterschiede zwischen den beiden Sprachen bezüglich der übertragenen Bedeutung zu konstatieren. "Kuchibashi ga **kiiroi**" (Der Schnabel ist **gelb**) oder "**Kiiroi** Kuchibashi" (der **gelbe** Schnabel) im Japanischen z. B. bedeutet "jemand ist **grün** (unerfahren) " im Deutschen. "Das **Blaue**" in der deutschen Wendung "das **Blaue** vom Himmel herunterholen" bedeutet "das Unmögliche", das Wort "**Ao**" (blau) im Japanischen hat dagegen diese metaphorische Bedeutung nicht, "ao" (blau) wie "kiiro" (gelb) bedeutet im Japanischen "unerfahren, unerwachsen" wie in der Wendung "Shiri ga **aoi**" (Der Hintere ist **blau**). Auf die unterschiedliche metaphorische oder symbolische Bedeutung der Farbbezeichnungen soll geachtet werden, vor allem wenn es um die politische Symbolik der Farben geht (z. B. braun=Nationalsozialismus). Beim konstrastiven Vergleich werden die entsprechenden Wendungen auf "Falsche Freunde" hin betrachtet. Dabei sind beispielsweise folgende Wendungen als "Falsche Freunde" festgestellt worden: "**Aoku** naru" (blass werden):"**blau** sein" (betrunken sein); "**Akai** ito" (Liebesschicksal): "**rote** Faden" (Leitmotiv, Anhaltspunkte); "**Aka**chochin" (eine Kneipe kennzeichnende rote Laterne): "die **rote** Laterne" (der letzte);

"**Koku**ban" (schwarzes Brett): "das **Schwarze** Brett" (Anzeigetafel). Im Deutschunterricht für Japanischmuttersprachler soll darum auf solche semantische und pragmatisch-konnotationelle Bedeutungsunterschiede aufmerksam gemacht werden (z. B. "**gelb**" für "**neidisch**" oder "**Neid**" im Deutschen, "**kiiro**" für "**unerfahren**, **unerwachsen**" im Japanischen).